

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

## 福島県教育支援ボランティア活動報告①

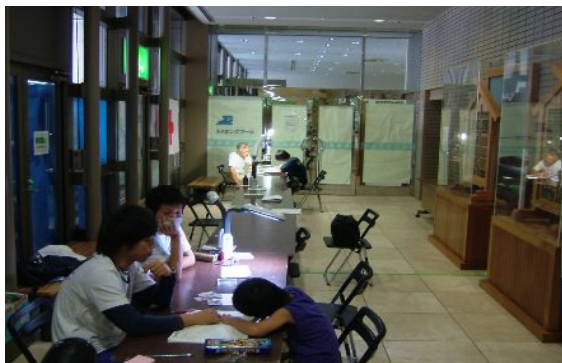
日本教職員組合 杉山 繁

福島チームの活動は、子どもたちへの学習支援活動・心のケアにつながる支援活動、ストレス解消につながる遊びや話し相手、さらには親の相談相手、そして子どもたちを預かることによって親の時間をつくるなど、幅広い目的をもったものでした。

私たち奈良教組・奈良高教組・岡山県教組・佐賀県教組の仲間は、7月23日(土)～27日(水)の5日間、福島市・郡山市の避難所や仮設住宅で生活する子どもたちと、午前は勉強、午後は室内遊びという形を基本パターンに過ごしました。日教組独自ボランティアとしては第2タームの期間ではありましたが、福島県内の夏休み開始時期の関係で、福島チームはこれが初めての活動になりました。果たして子どもたちは来るのだろうかという不安や、第一陣としてボランティアの基礎づくりをしておかねばという緊張の中で試行錯誤の活動でした。

### ○あづま総合運動公園（福島市）

公園内の体育館が避難所となっており、南相馬市を中心とした方々が生活しています。その一角に学習スペースが設けられており、時間になると子どもたちがやってきます。幼稚園児から中3までの子ども



たちが入れ替わりやって来ては、勉強をして帰っていきます。

また、避難所には毎日、様々なボランティアが入り、イベントを行っていきます。子どもたちも自分が参加したいものを見つけては出かけていきます。体育館のエントランスホールで行われるものもあり、マイクの声や音楽が学習スペースにも聞こえてきます。学習環境としては集中しにくいのではと思いましたが、子どもたちは平然と勉強しています。こうした状況は、もう日常になっているのでしょうか。

### ○ビックパレット仮設住宅（郡山市）

広大な敷地にたくさんの仮設住宅が建設され、川内村と富岡町の方々が生活しています。そのなかで、私たちは川内村の子どもたちへの学習支援を行いました。ここで生活している小・中学生は少なく、両親が共働きのため、昼間、仮設住宅の祖父母宅に預けられている子どもたちがやってきます。そのため、日によって子どもの数の変動が大きく、特に土・日は極端に減ってしまいます。川内村の集会所を使わせていただいているので学習環境は申し分ありませんでしたが、備品が不十分で、段ボール箱を机代わりにしなくてはいけない状況もありました。

ある日の午後、四・五歳の女の子と粘土遊びをすることになり、「何を作ろうか。」と尋ねると、「仮設住宅！」と答え、小さな家を作り始めた時には、私たちは顔を見合わせてしまいました。また、時間になったので「終わりにしようか。」と言うと、「うん。津波！」と言って、腕で一気に粘土をつぶしている姿を見て、私たちはまたも顔を見合わ



せてしまいました。川内村の子どもたちは、津波の被害を直接受けていません。しかし、話を聞いていると、祖父母や親類が行方不明の子もいました。子どもたちがどこまで意識しているのかはうかがい知れませんが、心の奥底に何らかの傷を負ってしまったことには違いないでしょう。

ビックパレットに役場機能が移転していることもあり、教育長が激励に来てくれました。

〈参加者の感想〉

- ・ 日教組ボランティア活動への参加は、自分の人生の中で、大変貴重な体験となりました。多少なりとも避難されている方々と話をすることができたし、子どもたちへの学習支援、そしていっしょに遊んだりする時間がもてたのは大変ありがたいことでした。
- ・ 三日目は、私たちが集会場へ来るのを待ってくれるまでに打ち解けることができた。普段は、宿題をしていても一緒に遊んでも佐賀の子どもたちと変わらない無邪気な子どもたちであったが、ある時、「早く村に帰りたい。」と言った子がいた。子どもたちは子どもたちなりに、原発事故が自分たちの生活をまるっきり変えてしまったと感じ、怒りを表現していたのかもしれない。
- ・ 屈託なく過ごしているように見える子どもたちでしたが、3月11日以来、転々と住むところを変えたことや、果たしてどこの高校を受ければいいのかと思悩んでいる中学生など、一人ひとりが重いものを背負わされていることも分かりました。僅かな間のふれあいでしたが、あの子たちが一日も早く、普通の日々を取り戻せることを願わずにはられません。

### ○稲川原仮設住宅（郡山市）

ビックパレットから車で30分ほどのところに、川内村の仮設住宅の一つ、稲川原仮設住宅があります。ここには幼稚園児から中学生までの幅広い年代の子どもたちが、毎日20人くらい、私たちの到着を待っていてくれます。参加する子どもたちが多くこともあり、子どもたちが生活のルールを話し合い、規律ある過ごし方をめざしました。

また、自治会長をはじめ住民の方々がとても協力的で、多くのおとなが集会所に顔を出してくれました。机が足りないと見れば家から持ってきてくれたり、飲み物やおやつを差し入れてくれたりなど、みんな子どもを見守っている感じが感じられました。おそらく、避難前の川内村でも同じような光景が見られたのではないかと感じました。

私たちの活動は地元テレビ局の取材を受け、夕方のニュース番組で放送されました。JTUの活動が少しでもアピールできたことは、うれしいできごとでした。

〈参加者の感想〉

- ・ 福島の子もたちは、岡山の子もたちと何ら変わりなく素直で元気な子どもたちばかりでした。少なくとも、我々が接した稲川原の子もたちに、震災や放射能によるつらさや暗さを伺うことはありませんでした。3日間いっしょに過ごさせてもらって本当に楽しかったですし、よい思い出がありません。逆に、子どもたちに我々がしたことはほんのわずかなことではなかったかと思っています。夏休みが終わるまでの1ヶ月あまりのボランティアで子どもたちの助けになればと思っています。

